

南部障害者相談支援センター（試行）の経過報告

長野市南部障害者相談支援センター

1、相談支援センターの体制

(1) 人員体制

専門員 3 名、ふくしネット事務局 1 名、（相談役 1 名）

(2) 運営体制

長野市（障害福祉課）、受託 4 法人の責任者を交え運営委員会を設け、活動状況や相談内容の報告、業務課題等について協議しながら進めている。

(3) 相談の進め方

- ① 相談依頼があったケースについては相談員 3 人で方向性を検討しながら対応している。
- ② 地区担当や障害種別担当は決めていない。
- ③ 毎朝ミーティングで 1 日の予定や対応について相談し、対応している。

2、複数の事業所が集まったの専門員の感想

(1) メリット

- ① 相談員一人で悩まずに、センターで方向性等相談しながら進められる。
- ② 独りよがりにならないで、自分の相談対応を見直すことができた。
- ③ 困難ケースにおいて、複数の相談員で関わりがもてる。
- ④ 新規ケースについて、3 名の相談員で調整し担当を決めるのでスピーディーに対応できる。

(2) デメリット

- ① 他機関等からの紹介の際、十分な聞き取りがされないまま、「とりあえず南部センター」として案内されてくることがある。
- ② センターとして集まったが管理体制等不明瞭で戸惑いつつ、業務の調整を図りながら取り組んできた。

3、外部機関からの反響

- (1) 障害分野については、地域ごとで迷うことなく長野市南部の範囲であれば、何でも聞ける窓口という分かりやすさを感じる。
- (2) 相談支援事業所からは、連絡が付きやすくなったという声が多く聞かれた。
- (3) 県や圏域からは、長野市の南部はセンター化されたが、以前と変わらず長野市の窓口は分かりにくいとの指摘はある。
- (4) センター化されたところで、事業所ごと相談を受けていた時以上に長野市委託の総合窓口としての印象が強くなった
- (5) 基幹相談支援センターと誤解されていることがある。

4、南部障害者相談支援センター試行の成果

(1) 長野市南部の相談傾向の把握

- ① 南部障害者相談支援センターで受けた新規相談・継続相談をまとめていくことで、長野市南部の状況や相談の傾向を広く分析しやすくなった。
- ② サテライトで行っていた時は自分の担当地区の状況把握のみで、地区特有の課題か市内全体の課題かが分かりづらかった。
- ③ 市へ相談件数の報告をあげているが、分析まではしてこなかった。

(2) 相談支援事業所・福祉事業所の状況把握

- ① 個々の対応ケースを日頃から情報共有していく中で、市内の事業所の状況が把握しやすくなった。
- ② ケースをもちよることで情報量が増え、他のケースに活かしている。

(3) 業務の平準化

- ① 以前は、それぞれの事業所で様々なつながりの中で相談を受けて来ていたので、サテライトの時には相談件数に差があったかもしれないが、窓口が一つになることで、複数の相談員の業務が平準化された。
- ② 対応の仕方も情報共有する中で自然と他者の客観的な視点が入り平準化につながった。

5、相談ケースから見てきた長野市南部の状況

(1) 相談者別新規ケース

本人・家族ら直接の相談は全体の2割程度。関係機関からの相談は8割程になっており、中でも行政からの相談が最も多い。

相談者	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	計	%
本人	3	4	1	5	3	1	1	1	4	2	3	4	32	10.8
家族	3	8	4	5	6	4	4	1	1	1	4	4	45	15.2
相談支援事業所	2			2			3	1	2	1	1	4	16	5.4
障害福祉事業所	3	6	8	6	4	3	1	1	1	3		3	39	13.1
就労支援機関	2		1		1	1	1	2	1		2	1	12	4.0
行政機関	9	11	3	8	4	4	7	5	5	5	3	7	71	23.9
保健センター	1		3	2		1	2		2		3	2	16	5.4
病院、クリニック	2		5	2	1	3	1	2	2	1			19	6.4
学校		1		1	3	1		1				1	8	2.7
スクールソーシャルワーカー	1												1	0.3
介護保険関係	2		1	3	2	2	5	3	2		1		21	7.1
その他	4	2	4	3		2					2		17	5.7
合計	32	32	30	37	24	22	25	17	20	13	19	26	297	100.0

(2) 地区別新規ケース

地区別にみると、篠ノ井・川中島・更北地区が約半数を占める。それに比較すると、中山間地からの相談件数は少ない。センターができた当初は巡回等顔合わせをしたいと考えていたが、実際に出向くのが難しく、地域をまんべんなく回り切れてはいない。

地区	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	計	%
安茂里	1	3	4	5	2	2	6	1	4	1	2	2	33	11.1
更北	8	3	2	2		3	2	4	2	2	4		32	10.8
七二会			1										1	0.3
小田切													0	0.0
篠ノ井	7	9	6	8	5	6	4	2	5	4	7	10	73	24.6
松代	4	4	3	2	3	3	2	3	1		1	2	28	9.4
信更				1	1								2	0.7
川中島	4	4	6	10	5	2	4		4		1	6	46	15.5
大岡	1		1										2	0.7
大豆島	2	2	1	2	1	1	2	2					13	4.4
若穂	1	1	1	1	3	1	2	1	2	1	1	1	16	5.4
その他（匿名等地区不明）	4	6	5	6	4	4	3	4	2	5	3	5	51	17.2
合計	32	32	30	37	24	22	25	17	20	13	19	26	297	100.0

(3) 継続ケースの内訳（令和2年7月現在）

委託専門員が単発的・一時的な対応で終結せず、6月以上に渡って支援を継続している又は継続的なつながりが必要と判断されるケースは87件となっている。

支援内容	継続人数	内 訳												%		
		サービス利用あり	サービス利用なし	支援方法							障害種別					
				関係機関	個別支援会議	電子メール	電話相談	同行	訪問	来所相談	身体障害	精神障害	知的障害		発達障害	
ケア会議情報共有	1		1				1					1				1.1
プランナーバックアップ	17	14	3		9		5	1	1	1	2	5	7	3		19.5
支援につなげるための関係作り	25	4	21	3	7		5		6	4	2	10	10	3		28.7
不安解消・整理	21	6	15		1	1	7	1	2	9	1	11	2	7		24.1
様子伺い・状況把握	23	2	21	1	3		8	1	4	6	2	9	7	5		26.4
合計	87	26	61	4	20	1	26	3	13	20	8	35	26	18		100.0
%	100	29.9	70.1	4.6	23.0	1.1	29.9	3.4	14.9	23.0	9.2	40.2	29.9	20.7		
		100		100							100					

(4) 継続ケースの内容

① 支援に繋げるための継続ケース

- ・ひきこもりで周りは福祉的な支援を必要としているが本人は現状維持希望
 - ・高齢の両親と障害を持った当事者など複数の支援者が関わっている。
 - ・継続的な面接を希望し、地域活動支援センターや保健センターにも繋がりにくい
- ☆障害福祉サービスを利用していない場合、委託の相談員だけではなく行政をはじめ、関係機関と一緒に支援の方向性を確認していくことが必要と考える

② 相談支援専門員のバックアップをしているケース

- ・家族全体に支援が必要で他の関係機関と連携し方向性を見立てを手伝う
- ・経済的に課題が多いケースと一緒に情報を共有し支援会議に出席しバックアップ
- ・圏域や県をまたぐケースで関係機関や事業所に協力を依頼する

6、総括

南部障害者相談支援センターの試行的な取り組みにより、サテライト型からセンター化することで ①外からの分かり易さ ②業務の標準化 ③チーム支援 ④地域の実情把握のし易さ 等の効果が見られた。一方、引きこもりや多問題を抱える家族等、制度の狭間で埋もれがちなケースなどの課題も明らかになった。障害分野に限らない地域の関係機関との連携を図るための地域巡回等の取組が思うように進められない現状も見えてきた。またセンターの運営に関して、複数法人から出向で集って実施している事業であり、その都度相談しながら対処しているものの、事務的な処理も含めた運営の基盤作りも早急の課題となっており、市も含めた取組が必要となっている。これまでのノウハウを生かし、より地域課題に応えられる相談支援体制を築くため、来年度予定されている北部障害者相談支援センターと協力しながら、より良いセンターの在り方を模索していきたい。